3P-107 次世代シーケンサーによる微生物混合培養系菌叢解析 技術の開発と揮発性有機塩素化合物分解系への利用

○池上 健太郎 ¹, 武知 文音 ¹, 北嶋 瑞樹 ¹, 岩本 めぐみ ^{1,2}, 福田 智美 ², 田村 紀義 ², 佐藤 万仁 ³, 照屋 邦子 ³, 保 日奈子 ³, 下地 真紀子 ³, 中野 和真 ³, 新崎 文香 ³, 城間 安紀乃 ³, 青山 みさ子 ³, 寺林 靖宣 ³, 照屋 盛実 ⁴, 平野 隆 ^{3,5}, 養王田 正文 ¹ (「農工大院・工・生命工,²PaGE Science, ³沖縄綜合科学研究 所,⁴沖縄県工業技術セ,⁵沖縄科学技術振興セ) kentaro.ikegami@yohda.net

近年、クロロエテン類による土壌、地下水汚染の浄化に有用微生物を用いた浄化技術であるバイオレメディエーションが実用化されつつある。バイオレメディエーションを実施するに当たり、菌叢モニタリング技術が菌叢制御や環境への影響評価法の確立に必須であるが、現在有効な菌叢モニタリング技術が確立されていない。本研究では、次世代シーケンサーを用いたメタゲノム解析を応用し新たな菌叢解析手法の構築を行った。次世代 DNA シーケンサー SOLiD で得られた read 配列の 16S rRNA 遺伝子データベースとの比較定量により、コンソーシア中に存在する微生物の種類とその存在比を算出した。また、トリクロロエテンで汚染された地下水を集積培養して得た Dehalococcoides属細菌含有コンソーシアを対象に菌叢解析を行いこの解析技術の評価を行った。

Method for the analysis of bacterial consortia using next generation sequencer and application for that involved in dechlorination of chloroethenes.

○Ikegami Kentaro¹, Takechi Ayane¹, Kitajima Mizuki¹, Iwamoto Megumi¹.², Fukuda Tomomi², Tamura Noriyoshi², Satou Kazuhito³, Teruya Kuniko³, Tamotsu Hinako³, Shimoji Makiko³, Nakano Kazuma³, Arasaki Ayaka³, Shiroma Akino³, Aoyama Misako³, Terabayashi Yasunobu³, Teruya Morimi⁴, Hirano Takashi³.⁵, Yohda Masafumi¹

(¹Biotechnol. Life Sci., Grad. Sch. Eng., Tokyo Univ. Agric. Technol., ²PaGE Science, ³Okinawa Inst. Adv. Sci., ⁴Okinawa Ind. Technol. Ctr., ⁵Okinawa Sci. Technol. Promo. Ctr.)

Key words next generation sequencer, microbial flora

3P-109 水圏の環境メタボノミクス技術高度化の試み

河口環境生態系は、ヒトの生存にとって必要不可欠な様々な物質や機能を創成 し、人類はその多大なる恩恵を享受している。このような貴重な河口環境生態 系を維持し、持続的に享受し続けるためには水圏環境評価技術が重要であり、 種々の環境要因を反映した水棲生物の生体成分変動や恒常性評価から、水圏環 境の本質を知ることができると著者らは考えている。本研究ではこれまでに、 NMR メタボローム解析および ICP イオノーム解析を用いて、魚類各器官にお ける代謝物プロファイルおよびミネラルプロファイルを評価するとともに、各 河川の環境情報を反映した魚類代謝プロファイリング技術の構築を推進してき た。しかしながら従来の NMR メタボローム解析では、魚類のようなタンパク 質由来高分子成分が多く検出されるサンプルにおいてはオーバーラップシグナ ルによる物質検出・同定の問題が生じるとともに、水溶媒を用いた抽出では親 水性代謝物のみしか評価することが出来なかった。そこで本研究では、水溶媒 に加えメタノール溶媒を用いて代謝物の抽出を行うとともに、それぞれの溶媒 に対して CPMG 法、WATERGATE 法、2D JRES NMR 法の三種類の NMR パルスシーケンスプログラムによる計測方法を用いて評価することで、オー バーラップ領域における高分解能化を実現するとともに、より多くの代謝物情 報を取得することに成功した。さらに、水圏環境評価のためのプローブ生物と して着目したマハゼに対して、本計測法を用いて各河川の評価を行い、得られ た各スペクトルデータの統合解析結果についても本会で議論したい。

Technical advancement for aquatic environmental metabonomics

○Seiji Yoshida¹, Makiko Akama², Yasuhiro Date¹-², Jun Kikuchi¹-²,3,4 (¹Grad. Sch. Nanobiosci., Yokohama City Univ., ²RIKEN, CSRS, ³RIKEN, BMEP, ⁴Grad. Sch. Bioagric., Sci., Nagoya Univ.)

3P-108 Analysis of bacterial community for sulfur cycle in conserved tidal flats in Ariake sea

○ Irfan Mustafa¹, Takao Yoshihara¹, Shigeru Morimura¹, Hiroto Ohta¹, Takuro Niidome¹, Tatsuya Masuda², Kiyoshi Takigawa³ (¹Grad. Sch. Sci. Technol., Kumamoto Univ., ²Prior. Org.

Innov. Excel., ³Ctr. Marine Environ.)
morimura@gpo.kumamoto-u.ac.jp

Tidal flats of Ariake sea are in a concern over the sulfide concentration exceeding tolerable limit for favorable condition of animal's life. Sulfide is mainly produced by sulfate-reducing bacteria (SRB) while decomposing organic matter. Naturally, sulfide is reoxidized by coexisting sulfur-oxidizing bacteria (SOB) and creating a balanced sulfur cycle. Human activities on the environment affect the composition of bacterial communities. Sediment samples from conserved tidal flats, the mudflat Midorikawa and the sandflat Shirakawa, were examined to reveal the structure of sulfur bacterial communities. Culture-independent approach was applied to obtain a clone library from the sediments extracted DNA. The library was built based on a marker gene which is responsible in both sulfur oxidation and reduction, the aprA gene. The 175 clones were identified as members of alpha-, gammaand deltaproteobacteria. Six clones were identified as SRB, while the others were identified as SOB. About two-thirds of the SOB clones were identified as uncultured gammaproteobacterial FM879003. This indicated that the FM879003 related SOB were dominant among sulfur bacteria at both area and might play an important role at Ariake Sea tidal flats.

Analysis of bacterial community for sulfur cycle in conserved tidal flats in Ariake sea

○Irfan Mustafa¹, Takao Yoshihara¹, Shigeru Morimura¹, Hiroto Ohta¹,
Takuro Niidome¹, Tatsuya Masuda², Kiyoshi Takigawa³
(¹Grad. Sch. Sci. Technol., Kumamoto Univ., ²Prior. Org. Innov. Excel., ³Ctr. Marine Environ.)

Key words sulfur bacteria, tidal flat, Ariake sea

3P-110 石油分解菌 Rhodococcus erythropolis NDKK6 のバイオレメディエーション中における挙動解析

○久保 幹, 堀口 悠, 大槻 祐人, Adhikari Dinesh, 向 真樹 (立命館大・生命科学・生工) kubo@sk.ritsumei.ac.jp

【背景・目的】

Rhodococcus erythropolis NDKK6は当研究室で単離したグラム陽性菌である。 R. erythropolis NDKK6 は難分解性炭化水素であるシクロヘキサンおよびアルキルシクロヘキサンの分解能を有することがわかっている。 R. erythropolis NDKK6 は、アルキルシクロヘキサンを唯一の炭素源として利用可能であり、その代謝経路も特定されている。また、R. erythropolis NDKK6 はアルカンヒドロキシラーゼ遺伝子(alkB 遺伝子)を有していることがわかっているため、バイオレメディエーションに有用な菌株であると考えられた。本研究では、R. erythropolis NDKK6 の持続的なバイオレメディエーションを行う条件検討と難分解性炭化水素の分解能評価を行った。 【方法・結果】

総炭素量(TC)を 16,000 mg/kg、総窒素量(TN)を 1,600 mg/kg に調整した土壌に、R. erythropolis NDKK6 は、 1×108 cell/g-soil になるように調整した細胞懸濁液および 5,000 mg/kg のドデシルシクロヘキサン(DDC)を加えてバイオレメディエーションを行った。その結果、42 日後の DDC 濃度は、R. erythropolis NDKK6 を植菌した場合には約 26%、末植菌の場合には約 46% に立りた。このとき、46% に対りたが残留していた。このとき、46% に対りたが残留していた。このとき、46% に対けたの情数は、植菌した場合、46% に対けたの場合には数えられないほどに減少した。 46% に対けたの場合に対象えるいなどに減少した。 46% に対けたの場合に 42% に対けたの場合に 42% に対けたの場合に 42% に対けたの場合に 42% に対けたの場合に 42% に対した。 42% に対けたの場合に 42% に対した。 42% に対し、42% に対した。 42% に対し、42% に対し、42%

増加する、という結果が得られた。DDC に代えて自動車エンジンオイルでも

Dynamics of Rhodococcus erythropolis NDKK6 during bioremediation.

同様な実験を行ったところ同様な結果が得られた。

OMotoki Kubo, Yu Horiguchi, Yuto Otsuki, Dinesh Adhikari, Masaki Mukai (Dept. Biotechnol., Coll. Life Sci., Ritsumeikan Univ.)

Kev words bioremediation